



木村耕三 著

## 巨大地震を考えよう

築地書館, 1984年, 202頁, 1,300円

書名は地震だが、この本は「東海地震とその対策」のほか「気候変動と食糧危機」、「三陸に住んで9年の体験報告」の3部から成る。そして評者の最大の興味は、この最後の章にあった。なぜなら地震や気候変動については、すでに著者の別の書「三陸へ逃げる」や「災害は進化する」などで、その論説に何がしか触れていたし、一方、最後のテーマについては、“三陸への逃亡”以来、ゆかしく思いながら、著者の消息に接することもなく過ぎていたから。

災害問題に限らず、都市の過密の弊を論ずる人は多い。また、都会の雑踏を嘆き、田園の自然を恋う人はいくらでもいる。しかし、自ら生まれ育ち、その後も生活の基盤を置いた東京に訣別し、鉄道も通わぬ地に移り住むということを実際に遂行する人は、ざらにはいない。気象庁観測部長を定年退職という実績と力を取って投げ棄ててであれば、一層、並大抵のことではあるまい。この稀有な人生実験の結果はどうであったか。

結論は当然、ひとことで要約できるほどに単純ではない。「毎日、アスファルトの道を歩き、ラッシュにもまれ、イスに坐り続け、自分の意志や好みに反した行為をも強いられ……」という日々からは解放された一方で、生活上の各種の不便や文化の面での不利益は言うまでもない。

しかし著者は豊かな自然の中で晴耕雨読しながら、これまで経験できなかった楽しさを次々と見出す。家から眺望する海岸や湾の奥行きを写真ではどうしても表現で

きず、しかし、幾何光学的には写真も誤っているわけではなく、結局、人間の知覚の深さの問題であろうこと。また、郷土史を研究して、それまで教えられて来た、支配者側に片寄りがちな歴史とは別の歴史があったこと。更には、野の赤いアザミを庭で賞でようと一株を移植して、それは豊かな土壌の中ですくすくと育つが、ちょっとした風で根元からポッキリ折れてしまい「雑草と競いながら細々と育つのでなければ、中空の茎をもったアザミは種を残すことはできない」と知ったり……。

初めに懸念したとおり、医療が最も難題であった。結局、著者は湘南の病院で胃の手術を受けることになるが、昔は保養地だったここでさえ、スモッグが星空を覆っている。「こんな汚れた空の下で医者通いを続けながら生き続けるのが幸せか、たとえ冬の風、夏の霧を嘆こうと、晴れた夜には降るような星空の下で生きたい」と、退院後はまた三陸へ帰るのである。

そして近年の医療診断装置の巨大化を論じて、「受感部だけを地方に分散設置し、そのデータを通信回線を用いて中枢で処理して、結果をまた端末に送り返すシステム」を提唱する。いかにもあの AMeDAS システムの生みの親たる木村さんである。

それから1年、この本の草稿を書き上げたところで著者は急逝する。あとがきに夫人が書いている。「いま窓から越喜来湾を眺め、10年前、出来上がったばかりのこの家に、2人で移り住んだ日の感激を、昨日のこのように思いおこしながら、一切を主人に寄り掛って、しあわせに安住した日々を限りなく懐しく思いおこしております。椅子に坐っても、庭や畑におり立っても、主人の面影は、あの日、あの時のままに、はっきりと私の心に映るのです」と。

(櫃間道夫)